

### 〈企画の趣旨〉

中世キリスト教思想において、「御言、イエス・キリストの受肉」という神秘をめぐる広い意味での神認識の問題が主題として論じられている。それは東方と西方で一見方法も目的も異質なそれぞれ独自の思想を展開しているように思われる。しかしながらこの問題をめぐって、東方と西方とを比較思想ひいては影響史という視点で多面的に検討することによって、中世キリスト教思想をより包括的な仕方理解するための視野を得られるのではないかというのがそもそも本シンポジウムを企画した動機である。神認識および神と人間との関係性・救済観をめぐる多様な思想の展開を検証することによって、いわゆるキリスト教神秘思想の有する根源的で普遍的な問題の本質を明らかにできるのではないだろうか。

2015年度のプログラムでは、まず「シンポジウム運動報告」としてカッパドキア教父に至るまでの古代教父たちにおける初期神化思想について俯瞰することを久松英二氏にお願いする。また、シンポジウムでも東方と西方両者に共通する水源としての擬ディオニュシオスについての提題を袴田渉氏にお願いする。谷隆一郎氏と大森正樹氏については、1992年のシンポジウム「中世哲学における神秘思想」の提題者でもあり、積年の研究の深化に基づいて、可能な限り西方と対比できる東方神学の特徴を浮き彫りにする提題をお願いすることにした。

2016年度のプログラムでは、西方の3人の思想家を選び、その神秘思想について検討する。具体的には、(1)エックハルトにおける神認識について、(2)クザーヌスにおける〈神を観る〉という思想について、(3)十字架のヨハネにおける神との合一についての提題をお願いする予定である。さらに2015年に取り上げた擬ディオニュシオスの思想が西方においてはどのように受容され、いかなる展開を見せたかについても検証を深めたい。

2015-16年度シンポジウム企画委員：

井上 淳，上村直樹，小林 剛，河野一典（文責）

---